

佐伯市戦後五十史（二九）

— 昭和五十年代の

文化・スポーツ —

矢野 彌生

（会員 佐伯市中山区）

〈前号〉

二八 昭和五十年代の低成長下の佐伯

（一）特定不況地域

（二）佐伯市への影響

二九 昭和五十年代の文化・スポーツ

（一）佐伯の文化

市立佐伯図書館 〈建設の要望が強かった新図書館〉

の開館 佐伯市では、これまでは山手公民館

に付属した図書館があったが、これも狭く少ない本しかなかった。また、利用者も少なく、どこにあるか知らない市

民が多かったのではないか。

昭和五十四年（一九七九）に策定された『商業近代化計画書』の中に「佐伯にほしい都市施設」というアンケートがある。それを見ると図書館の要望はとび抜けて大きく、またアンケートだけでなく、いろいろな機会に図書館建設の意見が出されている。

〈県下で県立図書館に次ぐ規模〉

昭和五十六年十一月十六日にオープンした佐伯図書館は大分市にある県立図書館につぐ規模で今後の有効な活用が期待される。

新図書館の規模・面積は次のとおりである。

▼敷地面積 三千二百四十六平方メートル

▼建物 鉄筋二階建て（一部吹き抜け）

一階部分 八百九十七・一平方メートル

二階部分 三百三十一・四九平方メートル

計 千二百二十七・五平方メートル

▼総工費 二億八千三百九十七万一千円。

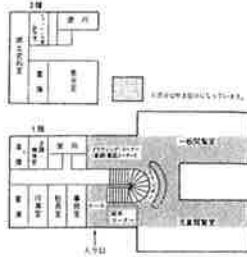
〈二万五千冊の蔵書でスタート〉 新図書館の蔵書は児童用約六千七百冊（うち新規購入分約六千冊）一般向け図書約八千三百冊（新規購入分約四千冊）の合計約一万五千冊である。

図書館に配備すべき図書数は、少なくとも人口にみあうだけの冊数（佐伯では五万四千冊）が必要だと言われている。新図書館の閲覧室には五万冊、書庫には七万冊、合計十二万冊の収納スペースがある。

開館時に一万五千冊という数は、かなり貧弱に見えることは否定できない。



新しく建設された図書館（昭和56年11月）



図書館内図（「市報佐伯」より）

〈図書館の利用について〉

開館当時の図書館の利用状況

況についてみると次の通りである。

- ①市民は誰でも自由に入室して本を読むことができる。
 - ②本を家庭などに持ち帰って読むことが出来る。しかし、初めて貸し出しを受ける時には「登録」が必要（次回からは必要ない）。また、登録書と引き替えに「貸出券」を渡す。貸出券があれば、いつでも借りたい本と貸出券をカウンターに出すだけで貸し出しを受けられる。
 - ③本を返納後は、プライバシー保護の面からも、誰が何を借りたかという記録は残らない。期間は二週間まで。
 - ④貸出冊数は一人三冊以内。
 - ⑤日曜日も開館。開館時間は午前九時から午後五時まで。休館日は毎月第三日曜日のほか、祝日、年末年始（十二月十九日～一月三日まで）と月末の図書整理日（一日だけ）。
 - ⑥リクエストサービスもある。
- 文化財（県・国指定の文化財） 佐伯には多くの文化財の指定があり、国・県・市の指定がある。その中で、今回は昭和五十年代に指定された四件について、その概要を述べる。

昭和五十一年（一九七六）には、二件の文化財が県指定

を受けている。県有形文化財として「佐伯城三の丸櫓門」と天然記念物の「狩生新鍾乳洞」である。

佐伯城三の丸櫓門は、渡櫓門で、毛利氏の城館入口にして寛永十四年（一六三七）に建造され、享保十一年（一七二六）再建、天保三年（一八三二）三建されている。県内で城郭建築の現存するものは少ない。

さらに狩生新鍾乳洞は昭和五十年（一九七五）に新しく発見されたもので、コウモリ、トビムシなどの洞穴生物も多い。秩父古生層南部帯の石灰岩層中に出来た鍾乳洞で、古生代二疊紀の石灰岩からなる。二酸化炭素を含む地下水によって石灰岩が溶けて洞穴が出来、更に石灰分を含んだ地下水から石灰が沈殿して、天井から氷柱状の鍾乳石、床からは筍状の突き出た石筍を生じた。又、規模とも風連、小半の鍾乳洞に匹敵する華麗さである。

また、昭和五十三年（一九七八）三月十一日指定された約四ヘクタールのハナカガシ林の主要部は国指定の天然記念物になり、その残り部分の境内林が県指定天然記念物となっている。ハナカガシ林は九州・四国の一部に産するブナ科の喬木で、大分県では弥生町（現佐伯市弥生）の祇園神社の社叢と堅田郷の城八幡社の二カ所が知られている。



城八幡社の自然林



国木田独歩文学碑

独歩文学碑の建設（城山山頂に独歩文学の足跡残す）佐伯史談会（高木嘉吉会長・会員五二人）と佐伯独歩会（狩生熊義会長・会員五二人）は、独歩ゆかりの地、城山山頂に独歩の足跡を残すため独歩文学碑を建設した。当時の新聞報道では、次のように状況を伝えている。明治の文豪、国木田独歩を讃える独歩文学碑が、ゆかりの地の城山山頂に昭和五十七年九月三十日に完成。現地では除幕式があった。

式には建立にあたった佐伯史談会と佐伯独歩会の会
員を始め、市の関係者等三十数人が列席、神事に続い
て高木嘉吉佐伯史談会会長等が除幕した。

碑は、高さ二・三メートル、幅四・四メートル。コンクリート製の台
座の上に、長径二・二メートル、短径一・二メートルの長円形の
韓国産御影石が浮いたように据えられ、「独歩文学碑」の文
字が刻まれている。裏面には「彼ほど佐伯の山野を深く愛
し遍く歩き、広く天下に紹介した作家はいない。……
春の鳥ゆかりの城山に此の碑を残して独歩文学の記念と
する。」と建設の趣旨も刻まれている。

碑建立は、佐伯史談会と佐伯独歩会が独歩文学の足
跡を残そうと五十五年一月に計画、建設費二百万円余
りは一般からの寄付金でまかなった。山頂には佐伯独
歩会が残した「独歩碑」もあり、これで城山山頂に二つの
独歩碑が誕生した。

〔朝日新聞〕昭和五十七年十月二日版)

独歩に関する記念碑は、独歩と親交のあった人たちが中
心になって、昭和八年（一九三三）に城山山頂に建ったの
が最初。

これが戦中から戦後のどさくさで取り除かれた後、昭和

三十一年（一九
五六）に建設し
たという歴史
がある。

第1表 昭和五十年代に指定された文化財

分類	指定主体	指定月日	名称	種類・規模など	備考 (所有・管理)
有形文化財	県指定	S51.3.30	佐伯城 三の丸櫓門	構造形式は屋根の入母屋作り	佐伯教育 委員会
				箕甲落、腰の両平腰屋根付き	
天然記念物	県指定	S51.3.30	狩生 新鍾乳洞	日本セメント佐伯工場の原石探掘中に 発見された鍾乳洞	狩生区
天然記念物	県指定	S52.3.31	城八幡社の 自然林	八幡社の周囲1.5Km、標高57mの丘陵地 の自然林（主要部4haを除く境内林）	城八幡社
天然記念物	国指定	S53.3.11	堅田郷 八幡社の ハナカガシ林	八幡社の周囲1.5Km、標高57mに分布 城八幡社の主要部4ha	城八幡社

〔佐伯の文化財〕 教育委員会 平成2年による・大分県文化財

各種文化団体（昭和五十年代の文化団体）

の 活 動

昭和五十年代にも多くの文化団体が活動しているが、その中からいくつかの団体について若干の史料でその概要を紹介したい。

佐伯合同短歌会 毎年発刊している佐伯合同短歌会について、当時の新聞報道では次のように述べている。

佐伯合同短歌会（佐伯市白坪区・真柴茂彦方）の五十七年度刊歌集『小半』（おながら・B6判二七九ページ）がこのほど刊行された。

歌を寄せているのは百六十三人、八雲、アララギ、花帖など所属はいろいろで、無所属の人も多い。

地域として佐伯と南海部郡内（現佐伯市）の人が多いが大分・日田・中津各市など県内各地、さらには福岡・京都小田原・松戸各市など遠隔地の人もおり、寄稿者は関東以西一円に広がっている。

佐伯合同短歌会では毎月一回、佐伯文化会館で歌会を開いているが、その学習の成果を、こうし



た歌集にまとめて年一回発行している。その際、各地からの寄稿を歓迎している。（以下省略）

〔大分合同新聞〕昭和五十八年一月二十七日版
さらに、『小半』には郷土の中学・高校の作品も転載している。昭和五十年代の歌集名を上げると次の通りである。

- ・ 轟 峠（昭和五十年）
- ・ 藤河内（昭和五十一年）
- ・ 暁 嵐（昭和五十二年）
- ・ 簾 山（昭和五十三年）
- ・ 猿 戸（昭和五十四年）
- ・ 椎の樹（昭和五十五年）
- ・ 久留須川（昭和五十六年）
- ・ おながら（昭和五十七年）
- ・ 柏 江（昭和五十八年）
- ・ 江武戸岬（昭和五十九年）
- ・ 佐伯鶴岡高校の社会部
- ・ 佐伯鶴岡高校の社会部（第十号より地理同好会から社会部に名称変更）は、毎年『県南の地理』の名称で毎年研究冊子を発刊しているが、研究内容については県大会で発表し、何度も優秀賞を獲得している。次に『県南の地理』の研究テーマと発刊年をあげる。
- ・ 第七号（米水津村の地誌研究） 昭和五十年
- ・ 第八号（直川村の地誌研究） 昭和五十一年
- ・ 第九号（蒲江町の地誌的研究） 昭和五十二年
- ・ 第十号（佐伯市の文化財） 昭和五十三年
- ・ 第十一号（弥生町について） 昭和五十四年

- ・第十二号（豊後佐伯城の研究） 昭和五十五年
 - ・第十三号（椎茸の地理的研究） 昭和五十六年
 - ・第十四号（大入島の地域調査） 昭和五十七年
 - ・第十五号（無垢島の地域調査） 昭和五十八年
 - ・第十六号（豊後佐伯城について） 昭和五十九年
- ふるさと書画展 小中学校児童生徒ふるさと展が昭和五十四年（一九七九）十一月二日から四日まで開催（寿屋七階）された。

今年昨年は昨年を上回る約千五百点の書画が集まった。内容もふるさとづくり、にふさわしく、図画では市内の史跡や町並み、行事、未来の佐伯などを描いたものが多く、書道にも郷土指向の傾向が見られる。

会場の寿屋七階催し場には、三日間で延べ五千人を超える見学者が訪れ盛会だった。

佐伯市で県立高校中央文化祭 第五回県高校中央文



ふるさと書画展

化祭の発表大会が、昭和五十五年（一九八〇）十一月二十八日佐伯文化会館で開かれた。

県高文連に所属している文化関係十一部門の今年度最優秀作品を集めて発表するもので、いわば『高校県体の文化版』。毎年県下各地を巡回し広く県民の理解を求めており今年度は佐伯市が会場となった。弁論・音楽・家庭部を始め職業、社会、科学各部の研究発表、さらには詩吟『大分を吟ず』、県高校演劇祭最優秀の中津高校演劇部の演劇『はじめの一步』、郷土芸能『宇目の歌げんか』などが、次々に発表された。

佐伯市民合唱団の五周年演奏会 佐伯市民合唱団は、昭和四十九年（一九七四）、市内の会社員や教師、公務員、主婦等三十人で結成。以来毎週火曜日の夜、仕事が終わったあと佐伯文化会館に集まり、中津留恵子教諭の指導で練習を続けている。昭和五十五年（一九八〇）二月二十三日、この日は創立五周年を記念して、交通遺児のためのチャリティコンサートを兼ねて開いた。「赤とんぼ」「通りゃんせ」等の童謡の他、中津南高校の佐藤信武教諭に依頼して完成した国木田独歩の詩『豊後の国佐伯』の合唱を披露した。交通事故で両親を失った子どもの真理を綴った『日曜日・ひ

とりぼっちの祈り』を合唱してフィナーレ。詰めかけた聴衆を魅了していた。

佐伯市民合唱団は、この日の売り上げの一部、約六万円を市公聴広報課を通じて市内の交通遺児に贈ることになっている。

県南初の劇団誕生 昭和五十七年（一九八二）三月に佐伯市城下東町の荒武バレエ研究所（荒武久美子主宰）は佐伯の人たちによる演劇活動を目指して劇団「七光色（にじ）」を設立している。県南初の劇団誕生での成長が大いに期待されている。

佐伯市美展十五周年記念展 昭和五十八年（一九八三）六月三日佐伯市美展（大分合同新聞後援）が佐伯文化会館で開幕。絵画（彫刻を含む）・書道・写真の三部に各協会員と一般応募の作品百十九点が展示、記念展という性格から各部門とも例年にない意欲作が集まった。市文化団体連絡協議会の岡田季幸会長は、写真部門について「全作品が県展入賞可能なレベルに達した。今年は良い作品が並んだ」と喜んでいる。初日から多くの市民が訪れている。

御手洗さんの作品は抽象・女心を赤裸々に画面にぶつけた感じの力強さにあふれている。森さんの書はギュッ

と凝縮した中に流れのスマートさを見た作品。河野さんの写真は、平凡な素材を非常にうまく作品化しており色調が魅力的。五日まで。入場無料。

（二）佐伯のスポーツ

昭和五十年代 昭和五十年代（一九七五～一九八四）のスポーツ の佐伯のスポーツの活動を若干の資料をもとに紹介したい。ここでは高校生・一般人を対象とした。

陸上 昭和五十一年（一九七六）佐伯鶴城高校陸上部

は高校県体総合優勝をしている。また昭和五十七年（一九八二）には第二十八回佐伯ロードレースが実施されており、一般の部（十二キロ・五キロ）と高校の部（五キロ）に分かれて活動している。

水泳 水泳の活動状況を見ると、佐伯鶴城高校の水泳部の活動が目立っている。詳細は第二表の通り。

体操 体操競技をみると、佐伯鶴城高校の体操部が独占的に活動している。また活動を概観すると第三表のとおりである。すなわち活動は県内だけでなく、全国レベルの質の高いものである。さらに山脇恭一（鶴城出）はロスア

ンゼルスオリンピックに出場、活躍している。

第二表 水泳部の活動

年度	主 な 成 績
五〇	・鶴城高校 高校県体男女共総合優勝
五一	・鶴城高校 高校県体男女とも優勝
五二	・鶴城高校 高校県体男女とも優勝
五三	・佐伯豊南高校 第九回大分県高校水泳競技大会・女子の部優勝
五四	・鶴城高校 高校県体女子優勝（八連勝）
五五	・鶴城高校 高校県体 女子優勝 （完全優勝 九連覇）
五六	・鶴城高校 高校県体 男子優勝
五七	・鶴城高校 高校県体男子優勝 （完全優勝・十連覇）
五八	・鶴城高校 高校県体男子優勝（二連覇） 女子優勝（完全優勝・十一連勝）
五九	・鶴城高校 高校県体男子優勝（四連勝） 女子優勝（完全優勝・十二連勝）

〔佐伯市学校教育史要覧〕による

第三表 鶴城高校体操部の活動

年度	主 な 成 績
五〇	・県高校総体 男女とも団体・個人総合優勝
五一	・全国大会 山脇恭二総合二位 跳馬二連勝
五二	・高校総体男女とも団体優勝・個人総合優勝
五三	・高校県体男女団体・個人総合優勝
五四	・高校県体 男子優勝
五五	・高校県体 男女共に優勝
五六	・高校県体男子優勝
五七	・高校県体 男子団体総合優勝
五八	・女子団体総合優勝（十回目） ・高校県体男子優勝（十八連勝） ・女子優勝（二年連続十一回目）
五九	・山脇恭二（鶴城出）ロスアンゼルスオリンピック出場 ・高校県体 男子優勝（十九連勝） ・女子優勝（三連勝・十二回目）

〔佐伯市学校教育史要覧〕による

ソフトボール 西田病院ソフトボールチームは昭和五十八年(一九八三)八月二十一日第三回全国家庭婦人フットボール大会で優勝、日本一の輝かしい成績を上げている。

ゲートボール 昭和五十年(一九七五)に社会体育の一環として取り上げられたゲートボールもすっかり定着し高齢者と婦人会を中心に急速に広まりゲーム人口は増えた。昭和五十四年(一九七九)五月二十日には番匠川第二スポーツ公園で第三回佐伯市ゲートボール大会が開催され、高齢者チームでは下堅田桜組、婦人会チームでは西上浦Cチームが、それぞれ優勝している。

弓道 佐伯鶴岡高校弓道部(女子)は昭和五十八年(一九八三)同五十九年(一九八四)の二年連続全国弓道選手権大会に出場し活躍している。

レスリング 佐伯鶴岡高校レスリング部の活動状況を見ると第四表のとおりである。これで明らかのように同校のレスリングの活動は著しいものがある。

なかでも昭和五十一年(一九七六)には伊達治一郎(鶴岡高出)はモントリオールオリンピックで大健闘し、見事に金メダルに輝いている。

第四表 佐伯鶴岡高校
レスリング部の活動

年度	主な成績	年度	主な成績
五〇	・県体優勝	五五	・県体一位
五一	・伊達治一郎(鶴岡高出) モントリオールオリンピック で優勝(フリースタイル)	五六	・県体優勝
五二	・県体優勝	五七	・県体優勝
五三	・県体優勝	五八	・団体レスリングフリース スタイルで牧野新吾三位
五四	・県体優勝	五九	・県体優勝

(佐伯市学校教育史要覧)による)

バレーボール 佐伯鶴岡高校が昭和五十六年(一九八一)に男子県新人大会で優勝、さらに同部は昭和五十七年(一九八二)に男子九州選手権県予選で優勝している。

野球 昭和五十二年(一九七七)に鶴岡高校野球部は県選手権大会優勝、昭和五十七年(一九八二)にも県選手権大会で優勝。また昭和五十七年には佐伯豊南高校野球部は第六十二回県高校野球選手権大会で優勝。さらに豊南高校は第七十回九州高校野球県予選でも準優勝の成績を上げています。

佐伯市民体育館 (待望の体育館の建設) 佐伯の体の落 成 育館の建設は、昭和五十年(一九七五)八月二十六日の第五回臨時市議会で可決された。市民



体育館

使用区分		料金(1時間)
一階	アマチュア	全面 800円
	スポーツ	半面 400円
	プロ(ノンプロ)	全面 3000円
	スポーツ	半面 1500円
二階卓球場		200円
※電燈料(1時間につき)		
●1階全灯……1200円 (公式戦)		
半灯……600円		
4分の1灯……300円		
●2階灯……200円		
※放送設備一式(1日)……1500円		

体育館の使用料

待望の体育館は環境浄化センター新女島分所に隣接する用地に建設されるもので、建設後は当分の間武道場を兼ねる。昭和五十八年(一九八三)四月五日から開館。落成記念行事には、公開演技、スポーツ試合が行われた。すなわち公開演技には古武道の型(剣道・柔道・銃剣道)、新体操個人演技が。スポーツ試合は、女子バスケット試合(市内高校選抜対一般県体出場チーム)、高校男子バレーボールの試合は佐伯鶴城高校対津久見高校で実施された。

- ・「大分県の文化財」(大分県教育委員会・平成三年)
- ・「佐伯市の文化財」(佐伯市教育委員会・平成二年)
- ・歌集「おながら」(佐伯合同短歌会 昭和五十七年)
- ・大分合同新聞(昭和五十八年一月二十七日号)
- ・朝日新聞(昭和五十七年十月二日号)
- ・「佐伯市学校教育史要覧」(郡市退職校長会編)
- ・「佐伯鶴城部活動史」
- ・「佐伯豊南高校創立五十周年記念誌」
- ・「佐伯鶴岡高校創立四十周年記念誌」

〔資料〕「市報さいき」(昭和五十年代発行)

(昭和五十六年十一月一日号)

(昭和五十八年三月下旬号)



体育館の位置